

弘化三年（一八四六年）十月 資料二二三号
大乘院宮笠置登山の準備よりこの時の住持の消息を推測する

解説 奈良大乘院主が関東下向の途中、登山する予定であったが中止となったとの通知。
差出人、宛先共になし。

大乘院は寛治元年（一〇八七）年に創建された奈良興福寺の門跡寺。歴代摂関家の子弟が門主となり一乗院と並んで、興福寺別当に任じられた。中世には一乗院とともに大和国守護職として勢力をふるったが、廃仏毀釈によって当時門主尚嘉は還俗して華族に列せられ、院は廃止された。

笠置山登山の主は隆温（一八一〜一八七五年 父は左大臣二条治孝）、藤原氏北家の流れ。一八六八年に還俗して男爵松園隆温となった。

要人の来山に際し、大庄屋や村役人が山へ登って見分を行い、座敷、障子等の張替をし、わざわざ泊り衆が夜に詰め、要人の来山を待つということとは、この時点では笠置寺に実質的に住持はなく、村の管理下にあった証しとみて良いであろう。

文殊院は住持秀栄が老衰でおそらく住持の任になく、弟子の法全が事務を代行していた。そして二ヶ月後の弘化三年十二月法全を住持にしたという書面が庄屋から奉行所へ出されている（資料二三四）。福寿院から申請されていないことにも注目する必要がある。

福寿院には住持是忍と即成（嘉永元年七月死亡 墓碑銘）がいたが、住持の是忍は二年たたない内に病気で死亡（嘉永元年七月 資料二四二）している。健康上の問題があったのであろう。

多聞院は弘化三年の年預であったが、役所等への挨拶などの記録がない。天保十四年（一八四三年）に多聞院印の文書があるほか（資料二二二）嘉永二年（一八四九年）の文殊院住持秀栄の葬儀に多聞院の席が設えられているが、この一八四三年から一八四九年の間、多聞院の行動を示す記録はない。

これらから実質的に住持が要人登山についての差配が行えなかったものと思われる。

原文

一十月七日南都大乘院宮、関東へ御下向

ニ付、北ニ御泊リ故、御登山在候由、去三日

狭川新右衛門殿ヨリ書状来リ、同四日、大庄屋

并村役人来リ見分之上、座敷、障子等張

替候事、然ル所、御出延引ニ付、

御登山無之候事、

一茶菓子、北より来リ候事、

一七日夜、泊リ衆庄次郎、重郎兵衛、喜八、
当院^ニ泊リ、八日朝八ッ時より起、様子相仕、
五ッ前、弥御登山無之由^ニ付、相行奉候事、
一古市御奉行所江^ハ内分之事故、
届出差上不申候事、

弘化三年（一八四六年）十月